

TABLE FOR TWO かわら版 補足資料

～Vol. 4 ウガンダ視察訪問記～

ご担当者の皆様、日頃は TFT プログラム実施のため多大なるご支援を頂戴しまして本当にありがとうございます。本資料は、かわら版だけでは伝えきれない支援先の情報を皆様にご覧いただくための補足資料です。貴組織内でのコミュニケーションや PR 等のご参考にしていただければ幸いです。今後とも引き続きのご支援、何卒よろしくお願い申し上げます。
(TFT 事務局一同)

視察の目的

皆様よりお預かりした寄付金が適正に使われているかどうか、私共スタッフの目でしっかりと確認する事が目的です。皆様からのご支援による学校給食プログラム実施先は引き続きアフリカのウガンダ、ルワンダ、マラウィの 3 か国です。今回はウガンダを再訪し、現地・ルヒィラ村のオムウィチャンバ小学校を中心に訪問をしてまいりました。

なお、かわら版は原則として 3 か月に 1 度の発行とさせていただいておりますが、現地の状況により視察の時期がずれる事があります。最新の情報をお届けさせていただくべく、視察の後に発行させていただく形で進めさせていただきます。ご理解の程お願いいたします。次回視察が 11 月末のため、次回かわら版の発行は 12 月になります。

1. 概要

● 給食の効果

子どもたちが、一日に必要なビタミンの約 7 割、およびエネルギー量にして半分以上を満たす食事を平等に採れるようになった。給食導入前は、自宅から弁当を持参する子ども、自宅に戻り食事をする子どもに分かれていた。かつ、栄養素やバランスの観点からも十分とは言えない内容であった。

● 給食による学校教育への寄与

子ども達にとって、摂取エネルギーと必要な栄養バランスが向上することが、心身いずれもの健康改善に結びついている。給食は授業への集中度を上げるだけでなく、登校そのもののモチベーションにもなっている。これは他の各国（マラウィ、ルワンダ）も同様。結果、教員の取り組み姿勢も明らかに前向きになっている。

● 給食発の新しい変化：栄養強化と自営自立、地域社会の啓蒙

学校給食の運営をきっかけに生まれた 2 つの取り組みが特記される。一つ目は、給食の栄養の更なる充実と資材の自給を目的とした、学校菜園と、給食を調理するために必要な燃料資源を確保する植林活動である。更に、これらの余剰物販売を学校運営の現金収入に充てるという自営自立への動きである。二つ目は、これらの取り組みを通じて学習した内容を、子ども達が地域へ広め、生活改善に繋げていこうという、啓蒙活動である。子どもたちが学習する内容は、①収穫物販売を通じた経済面、②現地で深刻な問題である単作農業や単品偏食を改善する多毛作に関する農業の知識、③調理や栄養の知識、④植林を通じた森林保護などの環境の知識、まで多岐にわたる。取り組みにあたり、子ども達を「CHANGE AGENT」と名付け、地域や国全体の貧困問題を変革していく将来のリーダーとして期待している。

2. 視察報告 Uganda Ruhira Village, 2009年7月21日

今回の訪問は、ウガンダ・ルヒイラ地区にあるミレニアム・ビレッジ・プロジェクト（MVP）（※）対象の小学校。

給食支援体制の充実

TFT プログラム実施先の給食が、更に衛生的かつ経済的に支給されるよう、現地での努力が継続している。

- 対象 21 の小学校のうちの 7 校で新しい給食室が整備された。以前の給食用の調理場は、雨季と乾季で極端な自然状況に曝される現地において、雨露や風・ほこりが避けられず、食材や飲料水を清潔かつ安全に確保することが困難な施設が多かった。これが給食プログラム運営上の深刻な問題であったが、継続的に改善へ向かっている。
- 炊事用かまども、新たに熱効率が改善されたものを導入。現地では高価で貴重な資源である燃料用の薪の使用が、以前の半分程度まで節約できるようになった。

※ミレニアム・ビレッジ・プロジェクト（または MVP）

国連が 2000 年に設定した開発途上国の貧困削減計画「ミレニアム開発目標」のモデル地域「ミレニアム・ビレッジ」を運営するプロジェクト。現在、アフリカ 10 カ国の 79 の村が指定されている。

学校菜園と植林プロジェクト ～給食から始まった、栄養強化と自営自立活動・地域の啓蒙～

学校給食の運営をきっかけに、新たな 2 つの取り組みが始まっている。

	目的 1) 給食と学校運営の改善	目的 2) 社会生活の改善
取り組み① 学校菜園による農業学習 校内で子どもが多種の野菜・果物を栽培。週 40～80 分の授業で技術やスキルを学ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> ● 給食の栄養価充実 ● 素材自給 	<ul style="list-style-type: none"> ● 多岐にわたる作物栽培（多毛作の知識）による、単作（バナナなど）からの脱却 ● 多様な食材の給食調理と実食による、栄養の知識や食生活のバランス改善
	<ul style="list-style-type: none"> ● 余剰品販売による現金収入獲得～学校運営への充当 	<ul style="list-style-type: none"> ● 学校の自立運営（教員）・職業トレーニング（子ども）
取り組み② 植樹・植林活動 校内に苗床を作り、校内および自宅周辺に植樹を行う。毎週、放課後の 40 分を管理活動に充てる。	<ul style="list-style-type: none"> ● 調理用の薪自給 	<ul style="list-style-type: none"> ● 資源乱伐・購買に頼る仕組みから、資源の育成～自給へのシフトチェンジ ● 森林乱伐による深刻な環境問題の改善
	<ul style="list-style-type: none"> ● 余剰品販売による現金収入獲得～学校運営への充当 	<ul style="list-style-type: none"> ● 学校の自立運営（教員）・職業トレーニング（子ども）

- 学習に使われる栽培作物は、ほうれん草、ブロッコリー、トマト、キャベツ、イモ類や果物など。現状、バナナの単作以外の農作物栽培のノウハウを現地に普及させるため、別途農業指導も提携団体により実施されている。バナナは全体の 8 割が水分と言われ、それ単体では栄養素的には決して十分な作物とは言えない。
- 植樹に関しては、Two Trees a Child という仕組みを導入。学校の子ども一人につき 2 本の苗木を学校の敷地内で育てる。学校で植林を学んだ子どもたちには、自宅周辺にも植えられるよう新たに 2 本の苗木を持ち帰らせている。背景には耕地確保や薪木のための過剰な森林乱伐（ハゲ山）の問題がある。これは、既に前回のウガンダ訪問時にも地域政府の緊急課題として「植林」に触れられてい

たほど深刻である。

- 作物の収穫の 6 割を給食に活用。4 割を市場で販売。同じく薪も余剰分を販売。収入は、外部調達が必要な塩や油の調達、給食調理人の雇用、学校施設の修繕費などに充てられる。その他、作物の種や苗を自宅栽培用に支給する試みも行われている。
- この仕組みそのものが、子ども達にとっての職業学習であり、教員にとっては学校＝事業として自立運営する必要性の理解へつながっている。
- こうして学校で学んだ考え方、技術、スキルを、子ども達—1 校あたり 600 人—が家に帰り、実践することで、コミュニティ全体に多毛作、栄養、環境保護、現金確保の考えた方が浸透していくことが、最終的に期待されている。いわば、中長期的な啓蒙プロジェクトでもある。そのため MVP では、子ども達を「地域の CHANGE AGENT」と名付け、地域や国全体の貧困問題を変革していく将来のリーダーとしての役割と期待値を明確化していた。
- 学校給食から出発して、学校から地域コミュニティに向けて新たな取り組みが誕生していることを確認した。

3. 事務局長 所感

ウガンダにて

空港からたどりついた首都カンパラは、高層ビルも目立ち、1 年前よりさらに都市化が進んだ印象。しかし、カンパラ市街を離れ、農村地域へ向かうと、やはり四輪駆動車以外では太刀打ちできない悪路が、相変わらず続く。進む先々に、現地の主たる農産物であるバナナを大量に積んだ小型トラックや自転車が行きかう。中には、荷の積み過ぎで横転している者も見かけた。肥沃な大地で農業指導や多毛作が進み、今後、豊富な農作物が収穫されることが予想され、それらを都市部や近隣の港まで運びだすための、インフラ整備の必要性を強く感じた。ウガンダでは、日本車や日本製品の性能やイメージから、日本そして日本の技術力への評判は大変高い。インフラ整備も含めた日本とのビジネス交流を希望する現地の方々からのご意見を多数いただいた。

その他、印象的だった人々

今回訪問したオムウィチャンバ小学校の先生達。エネルギーに溢れ、生徒子どもたちや新しい学校での取り組みについて熱く語ってくれた。その情熱的な目は学校の自律運営に向けての将来に向いていた気がする。

なおこの小学校にはインターネットが導入され活躍中で、先日はアメリカの小学校の子どもたちと Skype を通じて電話会議。環境についてディスカッションを行った。ウガンダの子どもは森林乱伐や焼き畑農業による森林の荒廃について語り、アメリカの子どもは大気汚染について話していた。

先生達もこのインターネットを使って、授業設計のための情報収集を行っている。これにより、既存の教材が内容も部数も不十分であった問題の解決に役立っている。

TABLE FOR TWO かわら版 補足資料
～日本での実施状況～

参加組織

- 企業：85
- 大学：18
- 官公庁、公的機関：20
- その他：15

⇒計 138 の組織で実施中（2009 年 8 月 13 日現在）

これまでに送った寄付金

- 第 1 回送金 2008 年 4 月
130,984 食分（約 600 人の子供の 1 年分の学校給食）
※2007 年 2 月のテスト実施分から 2008 年 3 月分まで
- 第 2 回送金 2008 年 7 月
63,034 食分（約 290 人の子供の 1 年分の学校給食）
※2008 年 4 月分から 2008 年 6 月分まで
- 第 3 回送金 2008 年 10 月
146,554 食分（約 670 人の子供の 1 年分の学校給食）
※2008 年 7 月分から 2008 年 9 月分まで
- 第 4 回送金 2009 年 1 月
250,484 食分（約 1,140 人の子供の 1 年分の学校給食）
※2008 年 10 月分から 2008 年 12 月分まで
- 第 5 回送金 2009 年 5 月
444,302 食分（約 2,020 人の子供の 1 年分の学校給食）
※2009 年 1 月分から 2009 年 3 月分まで
- 第 6 回送金 2009 年 8 月
416,311 食分（約 1,900 人の子供の 1 年分の学校給食）
※2009 年 4 月分から 2009 年 6 月分まで

⇒合計 1,451,670 食分（約 6,600 人の子どもの 1 年分の学校給食）